

# 人種研究の対象としてのアメリカスポーツ —黒人運動能力論争と日本人(アジア人)ステレオタイプの場合—

川 島 浩 平

## はじめに

今日、日米研究者の熱い視線が「人種」に集まっている。「人種のるっぽ」と称されるアメリカ合衆国ならば、それも当然かもしれない。社会科学や人文学において「人種」というカテゴリーやパラダイムが学術的関心を集めているとしても、今更注意を促す必要はない。しかし日本においても、科研プロジェクトなどで「人種」が取り上げられ、国際シンポジウムが開催され、その表象・表現としての側面に分析のメスが入れられつつあることは特筆に値する<sup>1)</sup>。

最近の知見では、「人種」は社会的構築物であり、生物学的、生理学的根拠はないものとされる。それは近代における帝国主義の産物であり、歐米列強諸国において鋸造され、植民地諸国に押し付けられたカテゴリーである。しかしながら、「人種」が社会的構築物であるにせよ、今日地球上の広い地域で認知され、受容されていることも否定し難い事実である。それゆえ、特定の時代の要請によって形作られた概念が、時代が移り変わってもなお支配的影響を及ぼし得るのはなぜか、世代を超えて再生産される認知のメカニズムは何か、といった疑問が生じることになる。

本稿は、以上のような「人種」に関する認識と問題意識に基づく研究を「人種」研究と呼ぶものとし、「人種」研究の対象としてアメリカスポーツ

に関わる領域を取り上げ、その際のテーマと方法論のあり方を二つの具体的事例によって示唆することを目的とする。

「人種」研究がアメリカスポーツを取り上げるべき理由は主として二つある。

第一に、様々な文化的領域や事象の中で、アメリカスポーツは「人種」に関する言説が最も頻繁に生産され、それゆえ私たちが最も強く「人種」を意識するものの一つである。例えばそのようなきっかけの一つとして、アフリカ系アメリカ人の運動能力の原因に関する論争を考えたい。アフリカ系アメリカ人は、総人口に占める比率が低い（約13%に過ぎない）にもかかわらず、主要スペクティタスポーツで圧倒的優位に立っている。三大职业組織であるNBA（バスケットボール）、NFL（アメリカンフットボール）、MLB（ベースボール）についてみても、それぞれ80%，67%，17%を占めるに至っている<sup>2)</sup>。比率の最も低いMLBでさえ、トニー・ゲイン、サミー・ソーサ、パリー・ボンズなど、私たちが名選手として思い浮かべるプレーヤーの多くは黒い肌をしている。2003年アメリカンリーグ新人王レースで、松井秀喜をおさえて栄冠に輝いたカンザスシティ・ロイヤルズのショートストップ、アンヘル・ペロアもまたアフリカ系である。彼らはなぜ優れたアスリートなのか？その答えを模索する論議の中で、アフリカ系アメリカ人は当然のごとく「黒人」という一つの「人種」とみなされる。「黒人」の特定スポーツにおける過剰な存在が、私たちを「人種」的思考に駆立て、またその中に閉じ込める傾向を有している<sup>3)</sup>。

もう一つ例を挙げよう。つい最近、「リトル松井」こと西武ライオンズの松井稼頭央のニューヨーク・メッツ入団が決定した。彼のメジャー入りが、野茂英雄以来連綿と続く、日本球界を代表する男たちのアメリカへの流出現象の延長上に位置づけられるものであることは、今更多言を要するまい。イチロー（鈴木一朗）や松井秀喜同様、リトル松井も日米両国で耳目を集めることが予想される。その理由は、日本においては、むろん彼が

日本人であり、私たちと国籍（ナショナリティ）を共有しているからにはほかないが、アメリカにおいては、「アジア人」という「人種」の一員であるからである。この点については本論でさらに論じるものとする。

第二に、アメリカスポーツが「人種」研究にとって肥沃な土壤であるにもかかわらず、実際の研究例は殊のほか少ない。一例として、ニチガイ・ウェブサービスによるデータベース「マガジンプラス」での検索結果を紹介しよう。キーワードを「アメリカ」と「スポーツ」の二つとし、「雑誌記事索引」と「学会年報・論文集」という二つの検索ファイルで探すと、それぞれで186件と28件の該当文献を得た（2003年12月26日現在）。ところが、この結果を「人種」で絞り込んでみると、それぞれ1件と0件だった（同）。このことは、アメリカスポーツと「人種」をあつかった研究が非常に少ないことを示している<sup>4)</sup>。

本稿はアメリカスポーツという肥沃な土壤に、「人種」研究の鍬を入れる試みである。副題が示すように、取り上げる事例は「黒人」運動能力論争と日本人（「アジア人」）ステレオタイプの二者である<sup>5)</sup>。両者は直接的に関連するわけではないため、本論は異なるテーマに二分されているかの印象を与えるかもしれない。しかしこのような構成は、「人種」研究の可能性を多元的に示すための、意図的なものである。また、いずれの事例も調査を継続中のテーマであるため、本稿の論点は過渡的なものであり、今後調査の進展によって修正され得る性質のものであることを予めご了承いただきたい<sup>6)</sup>。

以下、まず「黒人」運動能力論争について、次に日本人（「アジア人」）ステレオタイプについて議論し、稿末でそれぞれ関して現時点でのまとめを行うものとする。

## I. 黒人運動能力の原因論争

### I-（1）定義、歴史的背景、論争の枠組

本論争に立ち入る前に、その前提となる3点について述べておく。まず定義であるが、「人種」という概念に生物学的な根拠があるのかについて、専門家は概ね「否」という答えをだしていることを再確認したい<sup>7)</sup>。しかし生物学的根拠がないにせよ、社会的意味での「人種」は厳然たる事実として、歴史上、そして現在でも存在しているとする社会学的見解を支持する。本稿では、ジェイ・コークレーに依拠して「人種」を、「ある集団や社会で重要と信じられている遺伝によって形成される特質を共有しているがゆえ、社会的に他と異なるとみなされている人々からなるカテゴリー」と定義する<sup>8)</sup>。以下では「人種」、「黒人」、「白人」、「アジア人」など「人種」に関連する言葉から括弧を外すが、これらはすべてこの定義に基づくものである。

次に、本論争の歴史的背景を、白人対黒人の関係を軸として簡単に振り返っておきたい。奴隸制度という暗い過去を背負い、この制度の是非をめぐって国家分裂の悲劇さえ経験したアメリカにとって、これら二つの人種の関係が、様々な人種間関係のなかで最も重要な位置を占めていることは、否定し難い事実である。両者の関係は、良きにつけ悪しきにつけ、国家の社会体制、法秩序、経済構造のあり方を規定する要因の一つであったといっても過言ではない。

近代スポーツが成立したとされる19世紀中葉以降、二つの人種間関係はアメリカスポーツの発達と展開を左右する要因の一つでもあった。アメリカ南部で人種分離体制が敷かれていた19世紀末から20世紀半ばまでは、スポーツ界にも厳格にカラーラインが引かれていた。1936年のベルリンオリンピックで4つの金メダルを奪取したジェシー・オーエンス<sup>9)</sup>や、同じ頃「褐色の爆撃機」との異名で恐れられたボクシングヘビー級チャンピオンのジョー・ルイス<sup>10)</sup>ら黒人の活躍は、むろんスポーツ史上に燐然と輝いている。だが全体からみると、彼らの栄光も例外的エピソードに過ぎない。当時、スポーツに意欲を燃やす黒人の若者が目標とし得たものは、北部や西部にある一部の大学でアスリートとなるか、ベースボールのニグロ・リ

ーグのような、人種分離を前提としたプロフェッショナル・スポーツに籍を置くことくらいだった<sup>11)</sup>。

しかしながら、第二次世界大戦後にリベラリズムが高揚する中で、初のメジャーリーガー、ジャッキー・ロビンソンの誕生<sup>12)</sup>に象徴されるように、ベースボールを初めとして、バスケットボール、アメリカンフットボール等のスペクティタススポーツが、次々と黒人に門戸を開放した。その後1970年代や80年代になって、黒人アスリートの爆発的増加がみられた。最近ではゴルフやテニスなどでも才能の開花が目立ち<sup>13)</sup>、水泳での黒人オリンピアンの出現が待望されている<sup>14)</sup>。

アメリカスポーツ界において新参者である黒人が、なにゆえ短期間でかくも顕著なる台頭を果たし得たのか？言い換えれば、黒人の優れた運動能力の原因は何か？この問いは、黒人アスリートが顕在化する60年代後半以後、多くのジャーナリストや研究者の注目を集めてきた。かくして、本章の主題である黒人運動能力の原因論争のお膳立てが整うこととなった。単純化を恐れずにその論争を大枠で捉えるならば、二つの論陣の間での激しい攻防とみることができる。

その一方で、人種間には遺伝的に規定された運動能力の優劣が存在するとする、「遺伝派」とでも称すべき先天主義者がいる。遺伝的なアドバンテージゆえ、黒人は瞬発力や鋭い反射を必要とする種目で圧倒的に有利である、それゆえ国際大会でのメダル独占やベスト記録の保持が可能である、非黒人はいくら努力しても遠く及ばない、等の主張がこの立場からなされている。それはまた、しばしば人種間の知能差論争と連結して、極端な人種像の形成に力を貸してきた。曰く、黒人は生まれつきのアスリートだが、知能的に劣っていると。

そしてもう一方に、運動能力の発達は、知能同様、社会・文化的環境の力によって促されるとする、「環境派」とでも称すべき後天主義者がいる。曰く、アメリカ黒人のスポーツでの傑出は、長年の人種差別が他分野での成功機会を著しく制限してきた結果に過ぎない、差別が撤廃されれば、黒

人の才能は多方面に分散され、スポーツでの傑出も目立たなくなるだろうと。

### I-（2）運動能力の原因に関する言説の重層構造

以上のように大枠を設定した上で、本論争のいくつかのレベルに、具体的に焦点を当てたい。本節のタイトルを「重層構造」としたのは、先鋭な関心と問題意識が存在するにもかかわらず、それがいくつかのレベルに分断され、統一的な公の言説空間の成立を困難にしているからである。一面においてそれは、この問題がタブー視されている風潮と深く結びついている。

その一つのレベルに、黒人アスリートがいる。例えば往年、花形フットボール選手として鳴らし、90年代に元妻とそのボーイフレンドを殺害した容疑で裁判にかけられ、全米の注視の的となったO.J.シンプソンは、次のように語っている。「俺達はスピード用に作られているのさ。どんな学者とだってやりあう自信がある。スピードこそスポーツにとって重要で、俺達には天性のスピードがある<sup>15)</sup>。」イェール大学卒業後、ダラス・カウボーイズのランニングバックとして名を残したキャルビン・ヒルは、別の角度から自説を開陳する。「奴隸として運ばれてきた祖先の辛苦を考えてみろ。俺達はその子孫なんだ。苛酷な状況を生き延びた強者たちのな<sup>16)</sup>。」

両者に共通するのは、黒人は優れた運動能力を生まれつき持っているとする信念である。最近の報道は、このような信念が今日なお根強いことを伝えている<sup>17)</sup>。

だが、同じことを白人も口にできるわけではない。かつてスポーツ界の大物が「人種差別」声明を出したとして、首を切られる事件が起きたことがある。1988年、CBSの常連解説者ジミー・スナイダーは行きつけのレストランで食事中に、取材を受けた。話は黒人の運動能力に及び、彼は「アフリカ人奴隸がこの国で生き延びるために、どのような忍耐を強いいら

れたかを考えてみると、黒人アスリートは彼らの子孫なのだ」と語ったという。これは、ヒルのコメントの焼き直しといってもいい。だが彼は、発言後ただちに、メディアによる批判の集中砲火を浴び、職を解任された<sup>18)</sup>。

実はこの事件には伏線があった。その前年、ロサンゼルス・ドジャース経営者のアル・カンパニスは、ABCの「ナイトライン」による、ジャッキー・ロビンソンのメジャー入団40周年記念番組に出演していた。その席で、黒人は天性のアスリートだが、球団オーナーや監督などの管理職を務めるための資質に欠けていると発言し、44年間務めたドジャースを解雇されたのである<sup>19)</sup>。両者とも、人種問題に敏感な社会環境の下、タブーに抵触したために「肅正」されたといえよう。

このような、人種差別に厳しい社会環境の形成に一役も二役も買ってきたのは、社会学者を中心とするリベラル派の陣営である。とりわけハリー・エドワーズは、公民権運動が隆盛を極めた1960年代以降今日まで、一貫してスポーツ界における人種的ステレオタイプの流布に対して、警鐘を鳴らしつづけている。彼は、1968年にメキシコ五輪ボイコットを提唱した人物でもある。同運動は結局実りをみなかつたが、その余韻覚めやらぬ中、『スポーツイラストレイティッド』誌で黒人運動能力の先天的可能性をマーティン・ケインが指摘すると<sup>20)</sup>、これを断固として否認した。ケインが引用する証人の信憑性やサンプリングなどを逐一俎上にのせ、これを却下した後、結びで「黒人が白人より生まれつき優れた肉体を持っているというのは、無知で、思考力のない、鈍感な大衆を標的とした、単なる人種主義イデオロギーに過ぎない」と宣言した<sup>21)</sup>。

エドワーズの主張は、「スクールスポーツ対クラブスポーツ」という図式で独自の環境論を展開したジョン・フィリップスによって批判的に継承された<sup>22)</sup>。また、各種目でのポジションにおける人種的分布の不均等を環境派の立場から説明しようとする「スタッキング」研究も、エドワーズによる抗弁と期をほぼ同じくして始まった<sup>23)</sup>。80年代になると運動能力

の向上には「知覚能力」が重要であるとする研究も発表され<sup>24)</sup>、他方で「人種」というカテゴリーの使用そのものを否定する論者も現れた。NBC制作のテレビ番組を酷評した論考でローレル・デービスは、黒人アスリートの運動能力論争は、人種を固定的で、明瞭な生物的現実と捉え、人種形成の政治的プロセスを考慮しない点で、前提からして人種差別的であると論じた<sup>25)</sup>。ジェイ・コークレーは、アメリカスポーツの歴史と現在についての知を集大成し、黒人アスリートの卓越を説明する仮説を提起した。彼によるスポーツ社会学の教科書はその後幾度も改訂され、今日も広く読まれている<sup>26)</sup>。

社会学者による一連の主張を要約すると、人種は可変的、文化的な構築物であり、それが固定的カテゴリーであると前提する段階で既に偏見が入り込んでいる、黒人に固有な能力や資質など存在しない、それを想定・志向するあらゆる議論は白人の努力不足を隠蔽する方便に過ぎない、人種主義に対抗する戦略は、社会や教育の場において先天的人種差を前提とする議論を一切排除することである、などの諸点を指摘できる。

こうした人種関連の話題をタブー視する風潮が、現代においても根強く浸透していることはまちがいない。その実態は、最近の報道記事にも垣間見ることができる。1992年、シアトル・マリナーズに「山内オーナー」が誕生した時の事情に関して、記者はブレッド・ブーンとエドガー・マルティネスから「興味深い回答を得ていた」が、一度取材しようとすると、「プレイに集中していたから分からない」、「悪いが、さっきの発言は取り消してくれ」と、二人ともしり込みてしまったという。記者曰く、「一応人種問題にけじめをつけたかのように見える。だが今でも、雑談レベルでさえ、神経質にならざるを得ないのが実情」である<sup>27)</sup>。記事そのものは、事情を知らないとよくわからない内容だが、上述の経緯に照らすと、現代アメリカ社会の、人種を話題にすることに対する極度の緊張とタブー視を看取るのは容易である。

### I—（3）自然科学の言説

それでは日本でいう「ホンネとタテマエ」的な二元論なのかというと、ことはそう簡単ではない。黒人の運動能力論争に関する言説の第三のレベルとして、最近とみに研究成果を集積している、自然学者によるものがある。そこから浮かび上るのは、人種という人為的であるはずのカテゴリーで隔てられた人々の間に、科学的で統計的に有為な、集団的な差異が存在するかもしれないという可能性である。

自然学者は、多岐にわたる専門分野で人種にかかる調査に従事してきた。おおまかにいっても、反射<sup>28)</sup>、体質と体型<sup>29)</sup>、ホルモン分泌<sup>30)</sup>、性格や心理的特徴<sup>31)</sup>、臨床医学<sup>32)</sup>、筋肉纖維<sup>33)</sup>、成長速度<sup>34)</sup>、体脂肪率<sup>35)</sup>と骨密度<sup>36)</sup>、心肺機能<sup>37)</sup>、代謝機能<sup>38)</sup>、虹彩色<sup>39)</sup>、頭蓋サイズ<sup>40)</sup>など様々な分野で調査や検査を実施し、穏健なものから過激なものまで、多種多様な報告を行ない、学説を築いてきた。ここではそのうち近年とくに活発な議論を提起している二分野での動向を瞥見してみよう。これら分野での研究は、予想通り、タブーの縛りが強いアメリカ国内ではなく、諸外国、特にカナダ、オーストラリア、南アフリカ、ヨーロッパ等の研究機関や教育機関に所属する、医学や生理学の専門家が支えている。

その一つは、無酸素系運動である短距離走能力の優劣を、筋肉のタイプから判別しようとするものである。この分野の研究では、カナダのケベック大学研究班がよく知られている。その調査によると、筋肉は、短距離向きの速筋纖維と長距離向きの遅筋纖維の二種類に大別されるが、いわゆる人種として区別される人間集団間で、両纖維の割合に違いがみられるというのである。同研究班の実験では、速筋纖維の割合が、西アフリカ系黒人で平均67.5%，フランス系カナダ人で59%であったという<sup>41)</sup>。前者の方が、筋肉的に短距離向きであるという結論は、黒人が短距離に強いという私たちの印象を裏付けるものである。

もう一つは、対照的に、有酸素系運動である長距離走能力と関わっている。研究拠点はいくつもあるが、その一つ、オーストラリア、ケープタウ

ン・メディカル・スクールのスポーツ科学センターは、最大酸素摂取量での作業能力が、黒人の場合89%に達し、白人を10%近く上回るという実験結果を発表した。乳酸を基準として疲労の度合を測った場合も、黒の方が低いという<sup>42)</sup>。一方、南アフリカとオーストラリアの専門家によるシドニー大学の研究班は、同様に、黒人の「走行の経済性」に注目している。同班によると、一定の速度で走る場合、黒人は白人より新陳代謝の効率がよいとのことである<sup>43)</sup>。さらにデンマーク、コペンハーゲンの筋肉研究センターも、スカンジナビア人とケニア人の比較から、類似した結論に至っている。筋繊維を包む毛細血管数でも、酸素とグルコースを反応させ、処理してエネルギーに転換するミトコンドリアの量でも、ケニア人はスカンジナビア人を上回っている、というのである。疲労の進行を示す、アンモニアや乳酸の蓄積も、ケニア人の方が少ない。同班は、ケニア人はこれまで計測された中で、最高の有酸素運動能力を有していると主張する<sup>44)</sup>。

こうした自然学者の多くには、一つの興味深い共通の姿勢を観察できる。研究者の姿勢が真摯なものであるほど、研究成果の意味付けを限定された科学的事実に絞り、そこから波及しうる社会的、政治的意味合いへの言及を忌避する傾向がそれである。自分の研究は、もしかしたら人種をめぐる、より大きな舞台での論争の火付け役になる可能性を秘めるかもしれないが、その領域に立ち入るつもりはなく、単なる事実を提示するにすぎない、と言いたいかのようである。

自然学者の本意がいずれにあるにせよ、これまでの論点が示唆するのは、社会学者と自然学者の間に環境派対遺伝派という対立が、少なくとも潜在的には存在しているということであろう。そんな中、人文学やジャーナリズムの論者はいかなる態度を取り得てきたのであろうか？この問いに答える一つの手がかりとして、1980年代後半以降に出現した数名の論客に注目したい。その一人デビッド・ウィギンズは1989年、主要スポーツ史雑誌に「スピードはあるが、スタミナがない」という、挑発的な表現を冠するタイトルで始まる論文を発表し、黒人運動能力に関する研究史を

概観した<sup>45)</sup>。ジョン・ホバーマンは1997年、現代アメリカの人種問題への警告や、人種観の歴史的変容などを盛り込んだ大著『ダーウィンのアスリート』を上梓し、学界各方面に波紋を呼んだ<sup>46)</sup>。さらに2000年、ジョン・エンタインは『黒人アスリートはなぜ強いのか?』を公刊し、ジャーナリストの立場から、広範な聞き込み調査の成果を駆使して、忌憚のない意見を述べ、タブーに挑戦した<sup>47)</sup>。エンタイン著は日本でも翻訳され、広く注目を集めている<sup>48)</sup>。

これら三者を、遺伝派対環境派という大枠に位置づけるとどうなるか。ウィギンズとホバーマンは環境派の立場から、遺伝派を告発しているとみることができる。逆にエンタインは、そのような環境派の議論にも理解を示しつつ、遺伝派の証拠の確かさにそれ以上の手応えを感じているようである。遺伝派の、少なくとも心情的な支持者といってもいいだろう。その意味で、前二者とエンタインの間には論争が成立しているといえるし、三著に目を通せば、主たる論点をおさらいすることも不可能ではない。

しかしここでは、論理の応酬よりもむしろ、三者の共通点に注目しておきたい。すなわちそれは、人種に関する発言を押さえつけようとする風潮、つまりこれまでアメリカ社会を緊縛してきたタブーを打破し、対話を奨励しようとする意欲である。そしてより正しい、深い理解のために問題を明るみにだし、正面から向き合うことで解決を志向する姿勢である。この点を確認して、ひとまず第二の事例に論を移したい。

## II. 日本人（アジア人）アスリートとステレオタイプ

### II-（1）アジア人アスリートへの関心の高まりと「二流」イメージ

先述の通り、社会学者の告発があり、さらに多文化主義的思潮の影響もあって、アメリカの現代メディアは人種や民族的異質性についての発言や報道には、きわめて慎重な立場を保持している。しかしアジアを出身とする人々についてみると、黒人と並ぶもう一つの人種として頻繁に引き合い

に出され、度々ステレオタイプ化されているというのも、また一つの現実である。本稿の後半では、このような現実を照射しながら、人種概念が再生産されるメカニズムをさぐる手がかりを模索してみたい。具体的には、日本を代表する二人の野球選手を取り上げ、二人に対する報道をいくつかの角度から検討するものとする。そのための準備作業として、まずアジア人アスリートの肉体に关心が高まる経緯を概観したい。この経緯の中で形成されてきたイメージについても付言する。

アメリカでアジア人の人種性がスポーツと関連づけて盛んに論じられるようになった契機の一つは、私たちには皮肉にも映るが、日本が国際社会への復帰を飾った晴れ舞台、1964年の東京オリンピックである。アジアが初めて主催した五輪大会は、世界中の視線をかつてない規模でアジアとその人々に集めることになったが<sup>49)</sup>、アメリカ国内にはこの五輪に注目する独自の事情もあった。保守的な体制下、少なくともうわべは安定していたかに見えた50年代の社会は、60年代に入ると相次ぐ事件で大きく動搖した。62年のキューバミサイル危機、キング牧師が「私には夢がある」と熱弁をふるった63年のワシントン大行進、そしてケネディ大統領の暗殺。社会変革を求める若者のエネルギーは充満し、爆発寸前だった。

アメリカメディアは、東京五輪に、国内に鬱積した不満を晴らす一つのけ口を見出したようで、こぞって特集を組んだ。その大会では、黒人にとってのボクシングや陸上、アジア人にとってのレスリングや体操といった、特定の人種が得手、不得手とする種目が目立った。こうした傾向を、人種的体格や能力という観点から説明しようとする試みが次々と登場したのである<sup>50)</sup>。

その系譜を下ると、その一端は最近の「新人種主義」の議論と結びつくことになる。その代表的論客である、カナダの心理学者J・フィリップ・ラシュトンによれば、アジア人は過去数万年という進化の過程で、寒冷な環境を生き延びるために、少子養育重視型の生殖戦略をとるようになり、相対的に高い知能を、他方アフリカ人は、熱帯気候の中で多子放任型の生殖

戦略をとり、相対的に強い性欲を発達させたという。体型的にみると、知能が高いアジア人は頭蓋が大きく、また寒さから身を守るために熱の放出量が少なくなるよう、手足が短くなったという<sup>51)</sup>。こうした、「頭でっかち、胴長短軀」という体型的特徴は、陸上競技という基礎体力がものをいう部門での不利要因として、しばしばスポーツ関係者に指摘されてきた<sup>52)</sup>。このような学説や説明は、陸上界のメダリストや記録保持者にアジア人が相対的に少ないという実証的データと補完し合い、アジア人の運動能力や体力に関する否定的な、あるいは消極的な見方（具体的に表現するなら「グローバルスタンダードに到達しないアスリート」的イメージ）がかなり広範に出回っている現状を生み出してきたといえるだろう<sup>53)</sup>。

しかしながら、本章の冒頭で述べたように、ラッシュトンのような研究を危険視する傾向は学界に根強く、メディアもそうした知的環境の中で、人種的差異に注目したり、それを取り上げたりすることについては、きわめて自粛的であるという事実も看過することはできない。マスコミュニケーション学界やメディア学界からの人種的表現や記述に対する批判や警告も後を絶たない<sup>54)</sup>。

日本を代表する、個性的なスラッガーが相次いでメジャーリーグに乗り込んだのは、このようにアジア人の身体に関する議論が賛否合いまみえる中で加熱し、その人種的特徴への関心が高まった時点だった。いうまでもなくその一人は、7年連続で首位打者に輝き、日本球界史上最強といわれるアベレージヒッター鈴木一朗（以下イチロー）であり、もう一人は、「コジラ」の異名をとる怪力で、日本人としては十数年ぶりにホームラン50本の大台にのせ、トリプルクラウンにもう一歩とせまったくパワーヒッター松井秀喜である。イチローは2001年、松井は2年後の2003年にデビューした。アメリカメディアは、二人を、「アジア人」や「日本人」という固定観念にとらわれることなく、個人として、一つの人格として報道できたのだろうか？この点を、二人をめぐるメディアの姿勢や報道の言説を手がかりに検討したい。すると上で瞥見したような、「二流アスリート」とし

でのイメージとは別の、もう少し文化的、歴史的文脈と深く結びついたステレオタイプが浮かび上がってくるのである。

## II-(2) 日本人初のMLB フィールドプレイヤー鈴木一朗

イチローがデビューする前の評判を要約すると、関心の一つの焦点は、日本初の野手としてのメジャーリーガーが、実際に通用するのかという点にあった。イチロー以前、古くは村上雅則、最も注目を浴びた成功例としては野茂英雄がいた<sup>55)</sup>。だが、テクニックでかわすことが可能とされた投手とちがい、力不足という決定的ハンディを背負ったアジア人は、打者としてはやっていけないだろうとの通説が、頑として控えていた。イチローは、この固定観念に真っ向から勝負を挑んだのだ。

アメリカ専門家の評価は、「三拍子そろった好プレーヤー」<sup>56)</sup>等、比較的好意的なものもみられたが、基本的な論調は、「パワーとスピードで優るメジャーでは力のある速い球は引っ張れない」、「95マイルの速球は打てない」、「細い腕ではとてもホームランは打てない」などに代表される。打率予想も、平均すると「3割残せばラッキー、2割8分が順当」程度に集まつた。上で見た「二流アスリート」イメージは、ここにも影を落としているといえるだろう。驚くなれ、日本人評論家の意見も、極一部の例外を除いてアメリカ側に似たり寄つたりだった。イチロー評は概ね、パワー不足ゆえ、並の上程度という線だった。

したがって、1年目のシーズンが終了して、イチローが達成した数々の栄光は、間違いなく日米プロ野球関係者の度肝を抜くものであり、最も楽観的な論者の予測さえも優に上回るものだった。イチローの輝かしいレコードは枚挙にいとまないが、最も顕著なものには、首位打者（3割5分）、盗塁王（56回）、新人としての最多安打（242安打）、最優秀新人、最優秀選手などが含まれる。首位打者と盗塁王の二冠は、黒人初のメジャーリーガーと謳われたジャッキー・ロビンソン以来の快挙であり、まさにメジャー球史に残る偉業だった。

イチローの成功が、アジア人に関する固定観念を破るものとして広く歓迎されたとしても、驚くにあたらない。ロールモデル不在といわれ、「不在なる存在」<sup>57)</sup>といわれたアジア系アメリカ人にとって、アメリカ国技とされるベースボールの檜舞台で、一つの頂点を極めたのである。この事実を、あるアジア系研究者は「アジア系男性のステレオタイプに対する反証」と絶賛したが<sup>58)</sup>、それも頷けなくはない。その点で、イチローは人種の壁を乗り越えたといえるかもしれない。

けれども、イチロー報道にみられた言説を、別の角度から照射すると、たとえ賛辞であってもその背後に、人種イメージの影を見落とすことは困難である。例えばニューヨークの雑誌に掲載された次の形容がある。「寡黙のようで寡黙でなく、正確で、矛盾し、犬の世界にさまよい込んだ猫」<sup>59)</sup>。これは、オリエンタリズムの一環として厳しく批判されたアジア的ミステイシズム（神秘主義）を彷彿とさせるものである。ある評者はエドワード・サイードを援用して、西洋人のオリエント觀を「不可思議で、異國風で、逆行的で、野蛮で、計り知れない、劣等なる他者」<sup>60)</sup>と表現しているが、「野蛮」と「劣等」はともかく、「不可思議」や「計り知れない」は、先のイチロー評と興味深く共鳴するとはいえないか。

イチロー描写にみられたもう一つのパターンは、彼の個性や特殊性として、「練習熱心」と「技術の野球」が強調された点である。しかしあmerica人の日本人論に少しでも馴染みのある読者なら、こうした形容辞によって、1970年代に一世を風靡した「エコノミック・アニマル」としての日本人を想起しないではいられないだろう。

総じて、アメリカメディアによる評価は、イチローの独自性に注目しながら、皮肉にも、「オリエンタル」と「日本人」という二重の意味で、アジア人という人種との連想を強化する結果を招いたのである。

## II—（3）松井秀喜と日本（アジア）人ステレオタイプ

では松井の場合はどうか。既に述べたように、イチローとの比較で松井

が際立っていたのは、彼が日本屈指のパワーヒッターであり、球界を代表するホームラン打者である点である。アメリカメディアもそれを意識して、松井がボールをどのくらいスタンドへ運べるかに注目した。力で劣るといわれるアジア人の打力が興味の最大の対象であり、そこにこそ人種の壁を破る可能性が秘められていたといえるだろう。換言するなら、「二流アスリート」イメージをより直接的に払拭する期待は、松井の打棒にこそかけ得たといえる。容貌もまた、ややもすると無表情にみられるアジア人にあって、「ゴジラ」は変化に富み、一目で印象に残るものだった。「皮をむいていないジャガイモ」という失礼な記述もあった<sup>61)</sup>。日本製大怪獣は世界経済の中心地に上陸して、常識を覆す破壊力を発揮したのか？だとしたら、メディアの対応はどうなっていたであろうか？

ところが、盛大なデビュー会見から、ゴジラ上陸のシナリオは大きく書きかえられることになった。松井の控えめでおとなしい表情は、「羊のようにおどおどした」と揶揄された<sup>62)</sup>。その後、プレシーズン、本シーズンを通じて、ホームラン数は伸びず、アジア人のパワー不足を証明する結果となった。代わりに得た称号は、「グラウンドボール（ゴロ）キング」<sup>63)</sup>、「コンタクトヒッター」<sup>64)</sup>など、どちらもこつこつとヒットをかせぐ働き者をイメージさせるものである。残念ながら、「二流アスリート」イメージは補強されこそすれ、打破され得るべくもなかった。打点面では、大筋で一般的の期待を上回る成績を残し、十分賞賛に値する。とはいえ、シーズン前の期待とは異なる成功の軌跡を残したことに、異論の余地は少ない。ゴジラは、急激に飼い慣らされてミニサイズになった。

打棒の爆発力に対する関心の低下と反比例するかのように、松井の長所として度々引き合いに出されたのが、その人柄の真面目さ、誠実さ、謙遜さなどである。殊に、メディア関係者に対する敬意と親睦的態度は、アメリカレポーターに衝撃を与えたようである。報道記事から引用しよう。「マツイは日米両国のレポーターと親しくなり、自分の有名人としての立場をわきまえつつ、その地位を謙虚に受け入れた。」「マツイがメディアと

の対応で見せた忍耐力の結果、スポーツライターは彼に“グッド・ガイ”賞を贈った。」「マツイは自分から目立とうとすることがない。」<sup>65)</sup>

こうした言説は、松井に関する報道でくどいほど繰り返されてきた。それが何を意味し、どう解釈すべきかを判断するには、もっと多くのデータを収集した上で慎重に考察すべきであることはいうまでもない。さしあたってここでは、それらの言説が表象し、あるいは反映する価値、性質、イメージなどが、アメリカにおける日本人（アジア人）ステレオタイプと密接に結びついていると考えておきたい。このような仮説を検証する準備作業として、以下では2003年7月中旬にみられた松井報道のうちから、二つの事例を抽出し、それぞれの内容を具体的に分析してみたい。

その一つは、アメリカのスポーツチャンネルESPNが公式ウェブページで繰り広げた、松井のオールスター出場をどう評価するかについての論争である<sup>66)</sup>。これは、同局が二人の記者を「出場に値する」、「値しない」という対立する立場に立つよう仕向けて議論させたものであり、それぞれの記者が本音を述べているかは、保証の限りではない。とはいえ、この企画から、アメリカの世論を垣間見ることができるといえるだろう。

まず「値しない」という否定側に立った『プロビデンスジャーナル』紙のシーン・マッカダム記者の主張はこうである。現時点（2003年7月上旬）までの松井の打撃成績は、64打点、9ホームラン、そして打率、出塁率、得点、長打率、得点圏打率などではリーグ上位にも届いていない。そもそも松井に求められていたのは長打力だったので、なおさら期待外れといわざるを得ない（ヤンキーズに限ってみても本塁打数がロビン・ベンチュラと並んで5位につけているに過ぎない）。松井の打力は、お粗末とはいえないまでも、アメリカンリーグ外野手部門一般投票での得票総数第二位という人気には、およそ似つかないレベルである。それだけの票は、主としてインターネットを通して日本人ファンが投じたものである。しかし、同郷でデビュー1年目にオールスター出場を果たしたイチローと比較しても、実力は遠く及ばない。むろん、文化的差異を克服して本場のベースボ

ールに適応し、想像を絶する取材攻勢に耐え抜いた精神力は賞賛に値する。だがそれだけでオールスター出場という報酬が与えられるのには、納得できない<sup>67)</sup>。

これに対し、肯定側に立つ『レコード』誌のボブ・クラピッシュ記者はこう議論する。たしかに前半戦の成績をみると、松井よりも数字の上で優れているものは少なくない。松井は、日本には存在さえしないカットファーストボールやツーシーマーに苦しんだ。そうでなくとも日本の投手よりずっと早い速球を迎撃たなければならず、4月と5月のホームラン数は3本のみ。2002年のシーズンに50ホームランをたたき出し、「ゴジラ」の異名を持つ男にはおよそ似つかわしくない打撃だった。日本人記者の中には、松井をマイナーリーグに落とすのではないかと、ジョー・トーレ監督に尋ねたものもいた。しかし松井は立ち直り、6月に打率.394、ホームラン6本という見事な成績を残し、守備でもファインプレイをみせた。その上、彼と日常的に接しているものならば、彼はオールスター出場に十分値すると結論するだろう。忘れてならないのは、松井がどれほどメディアによる報道攻めにあってきたかである。ジーター、ジオンビ、クレメンスらヤンキースのスター選手でも松井ほど取材の対象にされたものはいない。しかも松井は通訳を通して応じなければならず、インタビュー時間は普通の2倍はかかっている。それでも、松井は取材を拒否したことがない。それは彼の言葉を借りるなら、「僕の責任」だからである<sup>68)</sup>。

ここで、反対の結論を導きだしているにもかかわらず、二人の論調には大きな共通点があるという事実に注目したい。それは、松井のオールスター出場の正否を判断するための基準を、どちらも主として二つ挙げている点である。その一つはいうまでもなくペナントレース前半の成績であり、もう一つは、本論の注目する松井の精神面での、言葉を換えるなら、人柄や性格といった彼の内面にかかる特徴である。まず成績についてみると、マッカダムはとてもオールスター出場に値するレベルではないと断定しているのに比し、クラピッシュは、前半を通してみると物足りなさを感じて

いるとはいえる、6月の立ち直りを高く評価している点で一線を画している。次に精神面の特徴についてみると、マッカダムは、やや冷めているといえ「賞賛に値する」と述べ、クラピッシュは、驚きさえ伝わるような論調で絶賛している。その点でこちらの基準においては、温度差はむろん存在するが、どちらも積極的に評価しているといえるだろう。

以上からわかるように、両者とも成績と精神面という二つの基準によって、松井がオールスター出場に値するか否かを議論しているということになる。少々強引に要約すれば、マッカダムは松井の人格的な長所を認めつつもそれだけでは不十分な成績を補うに足りないと主張するのに対し、クラピッシュはたとえ成績が不十分であったとしても、松井の精神面での努力はそれを補って余りあると反論しており、それゆえ反対の結論が導かれるということになる。いずれが説得的かは、読者の判断に委ねるほかないにせよ、二人の論争はある一つの点を印象づける特徴を有していることに、異論を差し挟むのは難しいだろう。すなわち二つの基準のうち、成績においては議論の余地があるが、松井の精神面での長所は特筆に値することである。それゆえこの論争は、ある特有の精神性、あるいは心の型というべきものの存在を、読者の記憶に焼き付ける結果をもたらす。この論争を読み終えた者に余韻として残るものは、松井の精神面での差異であり、傑出である。

二人の対立する論者がはからずも、同じように松井の精神面にこだわったのは、松井の個性ゆえなのか、それとも彼の国籍や人種が連想させるイメージやパターン、つまりステレオタイプに導かれたゆえなのかについては議論の余地があるとはいえる、本稿はとりあえず後者の可能性を支持し、そうしたステレオタイプが生み出され、再生産される原因と過程に注目するという立場をとりたい。この点については後述する。

第二の事例は、2003年7月15日、シカゴのUSセルラーフィールドで開催されたオールスター戦での、松井の初打席の実況中継である。担当は、アメリカ側はアナウンサーと解説者一人ずつ、日本（NHK）側はアナウ

ンサーに竹林宏、解説者に小早川毅彦と与田毅である。周知の通りこの試合は、ア・リーグのファン投票で選出されたイチローと松井がそれぞれ「1番・右翼」と「7番・中堅」で先発するという、日本人にとって球史に残るできごととなった。試合経過をみておくと、ア・リーグが八回、代打で登場したブラロック（レンジャーズ）の逆転2ランによって7—6で競り勝ち、昨年の引き分けをはさみ、6連勝を飾った。

松井の初打席は2回裏ア・リーグの攻撃で、ツーアウトランナー1塁にシアトル・マリナーズのマルチネスという状況でやってきた。マルチネスは直前の打席で、頭部に死球をうけたものの事無きを得ての出塁だった。投手はサンフランシスコ・ジャイアンツのジェイソン・シュミットである。ここでは、シュミットのマルチネスへの第4球から、日米両実況チームの対話を再現し、比較してみたい（以下に記載する時間は、この時点からの経過を示すものとする）。詳しくは以下に添付するスクリプトを参照されたい（スクリプト1、2）。

この比較によって、先述した精神性や心の型というべきものに関する認識の存在を浮かび上がらせるだけでなく、日米メディアの報道姿勢と内容におけるいくつかの興味深い差異を指摘することができる。ここでは、まず後者の差異を3点挙げた上で、前者の問題に取り組むものとしたい。

第一に、松井に注目する時間（スクリプトで薄暗い部分）が大きく異なる。日本ではマルチネスへのデットボールが大事に至らないとわかるや否や1分8秒の時点で、カメラが松井に切り替わる以前に「さあ、ランナーにてて、これで松井に打順がまわるということになりました」というナレーションが入る。ここから次打者トロイ・グロースの紹介に移る2分24秒までの時間は1分16秒である。一方、アメリカの実況では、デッドボールのショックが尾を引き、カメラが松井に切り替わってからも、解説者が身の安全を守る技術を学ぶよう子供の視聴者に熱く語りかけている。松井に話題が移るのは、彼が初球をスイングする直前の1分46秒の時点である。そこから、次打者グロースの紹介が始まる2分30秒までの時間は44

人種研究の対象としてのアメリカスポーツ 川島浩平

時間	話者	実況中継での発言
0:00	A	うわあ、頭に当りました。シュミット投手もマルティネスと同時に倒れています。「しまった！」と言ってるかのようです。エドガー・マルチネスはすぐに立ち上りました。ホワイトソックスのトレイナー、シュナイダーがやってきます。間違いなくこれは故意ではありません。
0:00		
0:01		
0:10		
0:17	A	シュミットはひどく悔やんでいます。ヘルメットのあの音をお聞きになったでしょう。
0:27	B	今、マルチネスを一塁に行かせては行けません、絶対に。
0:33		
0:34	B	球審のティム・マックレランも、即座にそう判断したようです。エドガーは起き上がって一塁へ行こうとしましたが、球審がとめました。「じっとしていなさい」、「まず医師の診察を受けなさい」、デットボールを受けた時は、そうしなければなりません。
0:42		
0:48		
0:51	B	いや、大変でしたね。
0:52	A	それでも一塁に向かいます。マルチネスはやるようです。
0:56		
0:57	A	マルチネスなら、そうすると思っていました。
1:02	A	マウンドのシュミットに話しかけたようです。
1:05		お茶の間の子供たちに是非、今起こっていることをみてほしいと思います。エドガーがどうやって自分を守ったのか。どうしてヘルメットをつけなければならぬか。リプレーをみてみましょう。ボールをしながら打撃姿勢を守っています。
1:08		
1:14		
1:17	B	そして最後の瞬間に身をかわしています。ボールが頭の上に来たのが幸いでした。最後の瞬間、ヘルメットでどうやって自分を守ったか、よく見てください。
1:24		
1:25		
1:28	B	ちびっこ野球選手は是非、この練習をやってください。テニスボールを頭めがけて投げ、ヘルメットにボールが当たる瞬間、身を沈ませてください。そうすれば大丈夫です。
1:35	A	シュミットは今シーズン5死球です。エドガー・マルチネスは一塁に向かいます。
1:42	A	ジェイソン・スミスは落ち着きを取り戻したようです。
1:45		
1:46	A	バッターボックスは松井、ヤンkeesのバッターが打ちました。内野は取れません。レフト前ヒットです。
1:48		
1:51		
1:54		アメリカシリーズ・チームにとって初安打です。ツーアウトランナー1、2塁です。
1:59	A	オールスター初出場の松井、初安打を放ちました。
2:04		
2:05	A	まずはのスタートです。
2:07	B	今シーズン、言葉がわからないので、松井とはあまり話していません。が、私はすぐに彼を気に入りました。彼はいつもにこにこして、クラブハウスに行くと、立ち上がって握手をしてくれます。私を見て、こんにちはとあいさつしてくれます。彼はこちらのベースボールに気持ちよく、簡単に適応したようです。まったく驚くほどです。
2:09		
2:19		
2:20		
2:24		
2:28	A	一塁コーチが初安打を祝福しました。
		スクリプト1：アメリカの実況中継にみられた対話 (2003年MLBオールスター松井秀喜初打席初安打の場面)

時間	話者	実況中継での発言
0:00	A	おっと
0:00	B	うおっと
0:01	A	頭です。エドガー・マルチネス、頭にあたりましたが。すぐたちあがった。
0:10	A	一瞬、こう、少し凜り付いたようなスタジアムですが、すぐに立ち上りましたけど
0:17	B	うむ、あの、立ち上がってはいけないんですけどね、エドガーはですね、まわりに心配、とくにシュミットにですね、こう、心配かけてはいけないと、いうの自分がすぐ、大丈夫だよと、この辺はやはりエドガーの人間性がでてるところだと思いますね。
0:27	A	そうですか、そしていま、その目をですね、こうしてうごかします。マイク・ソーシャ監督がいま、見つめています。イヤー今、まっすぐでしょう。
0:34	C	いや、チェンジアップですね。
0:42	A	チェンジアップが抜けたんですか。
0:48	C	もうあたった瞬間、あれですからね。シュミットもマウンドの上ですわりこんでしまいましたんですね。
0:51	C	
0:52		
0:56		
0:57	A	チェンジアップでさえ140キロはでていると、先程来申し上げてますんで、…今
のもう一球、もう一回ご覧ください。		
1:02		
1:05	A	しかし、このあとすぐ立ち上がる。
1:08	A	とあ、ランナーにて、これで松井に打球がまわるということになりました。
1:14	C	こういうかたちで松井にまわるとは、思わなかつたですね。
1:17	A	ウーン、さあ松井、シュミット初対決で、まっすぐとチェンジアップなわけですね。ここまでは。
1:24	C	そうですね。
1:25		はい。…そして、振り運んでいる選手が多いというそのまっすぐに対し、オール
1:28	A	スター初打席です、松井。
1:35		
1:42		
1:45	A	振ってたあ。つまたが、ヒットだあ。
1:46		
1:48	B	ほほほほほお
1:51		松井秀喜、オールスター初打席、初安打。初球から振っていました。あのメジャー・デビューも初球から振っていました。あのメジャー・デビューもレフト前ヒット。
1:54	A	
1:59		今日もレフト前。
2:04	B	そしてアメリカンリーグ初ヒットですよ。
2:05		
2:07	A	あーそうですねえ。
2:09	B	いや、決してあたりはよくありませんけどね。やはり、これでヒットを打つと、
		いうところやはり松井選手のですね、つよどといいますかねえ。
2:19	A	ああ、そうですか。
2:20	B	運をもっているというところをね、感じますよね。
2:24	A	トロイ・グロース、8番サード。
2:28		

秒に過ぎない。要するに、松井に費やした時間を日米で比較すると1分16秒対44秒となり、日本の方が32秒も長い。アメリカの実況を日本の局が行なったとしたら、おそらく日本のスーパースターの登場に十分な配慮をしなかったことに対する苦情が寄せられたであろう。だがアメリカでは、人口で今や黒人を凌ぐ最大マイノリティ集団であるヒスパニック系の、英雄マルチネスを思いやる時間が長いのは、当然といえるかもしれない。この一つのシーンから、日米の社会的事情の相違を読み取ることができるはいうまでもない。

第二に報道担当者間の対話のあり方にも違いが認められる。松井に関する実況時間中、日本側では、アナウンサーと解説者が交互に発言し、いわゆる掛け合い形式で対話が進行するのに対し、アメリカ側では、一つの発話に伴う情報量がはるかに多く、掛け合いというよりはレクチャー調で、一まとまりの内容のあるメッセージを伝達しようとしている（発話機会をみると、日本側でアナウンサーが7回、解説者が6回、アメリカ側でアナウンサーと解説者それぞれが2回と1回である）。このような対比を一般化できるかについては更なる検証が必要だが、すくなくともこの場面では、日米間に存在する発話者の興奮や、気分の高まりの明らかな差が、その一因であるように思われる。日本の担当者は、歴史的モーメントの目撃者として、同胞の松井に感情移入をしており、応援団的立場に身を置いているような印象を拭い得ない。他方アメリカ担当者は、ずっと冷静で、かつ淡淡とした口調で話を進めている。

これは、第三の点とも関連する。松井がバッターボックスで構えに入る1分37秒から、スイングをしてボールをとらえる1分45秒までの8秒間、日本の実況は沈黙を守る。担当者の顔を見ることはできないが、そこには「固唾を飲む」という形容がふさわしいかの雰囲気が漂っている。先述のように、アメリカの解説者はリトルリーガーに向かって松井とは無縁の話題で熱弁をふるった後、この時間になってやっと松井に視点が定まるわけである。

これまでの三点は、おそらく報道対象への、実況担当者の心理的コメントの差が表出した結果であろうと思われる。「身内」である松井に相当入れ込んでいる日本メディアと、複数いるオールスター初出場者の一人として扱うアメリカメディアの立場の違いが、以上のような顕著な対照をなす要因であるといえよう。余談になるが、このような違いは、後日の新人王争い報道にも反映された。日本では松井を新人王当確とみなす風潮が強かったが、そのような楽観論はアメリカではおよそお目にかかれなかった<sup>69)</sup>。少なくとも、アメリカメディアを主たる情報源としていれば、松井の新人王受賞に過度の期待を寄せることも、落選によってショックを受けることもなかつたであろう。

最後に、本題のステレオタイプ論に話を戻すために、松井がレフト前安打を放った直後のアメリカ解説者の発話を引用したい。

今シーズン、言葉がわからないので松井とはあまり話していません。が、私はすぐに彼を気に入りました。彼はいつもにこにこして、クラブハウスに行くと、立ち上がって握手をしてくれます。私を見て、こんなにちはとあいさつをしてくれます。彼はこちらのベースボールに気持ちよく、簡単に適応したようです。まったく驚くほどです。

ここで注目したいのは、話者が「言葉がわからない」と認め、コミュニケーションの厚い壁を自覚しているにもかかわらず、「彼を気に入りました」と好感を表明している点である。その根拠として「いつもにこにこ」、「握手」、「あいさつ」などを列挙している。しかしかくも表面的な觀察で、「気持ちよく、簡単に適応した」とか、「まったく驚く」といった、質的な評価を下せるものだろうか。本稿はそれが困難であるという立場に立つが、もしそうであるなら、解説者の印象は、実際に松井と交わしたやりとりというよりは、松井に出会う以前に存在していた日本人やアジア人に対する予見や予断に依拠しているといわざるを得ないのである。

本節ではこの点に特に注意を促したい。この発言はオールスター初出場での初打席という、日本人ならずとも注目する重要な場面でのものであるがゆえ、松井の「ナイスガイ」イメージをこれ以後、より一層アメリカ社会に流通させ、定着させたであろうと推察できる。だがここに見られるステレオタイプは、もちろん松井報道に始まったものではなく、アメリカにおける日本人（アジア人）論の一脈として、もっと昔から存在してきたのである。

これまで見てきたような、アメリカメディアが映し出す松井イメージに共通するテーマの、根源は何なのか？この問い合わせるには容易でないが、少なくとも40年前にある歴史的条件の下、松井報道の底流にあるイメージと類似した表象を生み出す言説が作り出されていた事実を突き止めることは、それほど困難ではない。それは、1960年代に流行った「モデル・マイノリティ」論である<sup>70)</sup>。戦争、日系人強制収容など、日米関係が最悪だった40年代、反日ムードが持続していた50年代を経て、60年代に入ると、日本人に対する雰囲気にも変化の兆しが見られるようになった。リベラリズムが公民権運動などを通じて体制を突き動かし、マイノリティに対して好意的な社会環境が形成される一方で、戦後無一文から再出発した日系人に加え、そのころから急増することになる他東アジア系マイノリティの中にも、中産階級の地位に到達する人々が増加した。彼らの台頭を説明するのに重宝された理論の一つが、「モデル・マイノリティ」論である<sup>71)</sup>。それは、日系人や他東アジア系のマイノリティの成功を、その文化的、精神的固有性とみなされた性質と結び付けて説明する点が特徴的である。曰く、個人主義や自由競争とは異なる価値観、すなわちアジア的な禁欲的、集団的エーストスが、成功の秘密である。彼らは、勤勉で、和を重んじ、礼節を大切にする云々。松井のメディア報道にみられる言辞は、こうしたアジア系エリートのものとみなされた美德や長所と奇妙に重なり合う。

ニュースストリーのねらいは、むろん称賛、感動、応援、激励、叱咤等、多種多様である。当然、そのための表現や、それを生んだ状況や事情も同

様である。しかし、そんな表現を一つ一つ拾い上げてパターンを調べ、まとめてみると、驚くほどの類似性が存在する。イチローにせよ、松井にせよ、二人を報道する言語を共通の糸として紡ぐものは、使い古されたアジア系ステレオタイプにはかならない。華々しい活躍も、逸材ぶりも、異彩を放つ個性も、結局固定観念の枠を飛び出すことはなかったようである。日本を代表する最もユニークなスラッガーは、カビの生えたようなステレオタイプを、皮肉にもよみがえらせたとはいえないだろうか。

### おわりに

稿を閉じるにあたって、黒人運動能力論争に再び話を戻したい。本論争でみられる言説の重層構造は、次のようにまとめられる。まず、黒人、白人どちらにも広く共有されている、黒人を天性のアスリートとする俗説（これを「神話」と呼ぶ論者もいる）があり、それは一般的日本人にも馴染み深いものである。しかしこの俗説に真っ向から、学究的に挑む社会学者の議論があり、他方論争への参加に消極的で、否定的でさえあるにもかかわらず俗説に科学的根拠を与えるかの印象を拭い得ない自然科学の学説がある。そして異なる言説空間を架橋し、真実への道を切り開こうとする人文学やジャーナリズムのスポーツマンがいる。

アメリカにおいて黒人の運動能力は、一つの学術領域に収まる研究対象ではない。それは、狭隘な学問的縛りを超越し、学界と一般社会をクロスオーバーする、まさに国家、世界規模の大論争の主題に他ならない。しかし、その規模にもかかわらず全貌が見え難いのは、発言者が分散し、分極化しており、専門を異にする集団間の対話が欠落しているからであり、また市民レベルでも、タブーゆえに公の対話が抑えられているからである。一部人文学者の対話を奨励しようという提案のねらいは、このような膠着状態を開拓するところにあるといえるだろう。無論、対話が問題を解決する保証はない。とはいえ、20世紀末に出現した論者による主張を、新しい

世紀にむけた、閉塞から脱出するための指向性を模索する試みとして高く評価すべきである。

次に日本人やアジア人については、非力で凡庸なアスリートというイメージと、ミステイシズム、エコノミック・アニマルに加えて、40年以上前の「モデル・マイノリティ」と現代の「ナイスガイ」の共有項にあたる、おとなしく控えめで、害のない人間としてのイメージなどが、ステレオタイプとして流通している可能性を示唆した。これだけからも、アメリカスポーツ界は、今日多方面からの批判に晒されている人種神話が、現在なお勢力を温存する領域の一つであるといえるかもしれない。その領域で生成される言説に警戒の目を光らせることは、アメリカ人を云々する以前に、私たち自身の偏見を自覚するための、勝てて自省的な行為であるとはいえないだろうか<sup>72)</sup>。

最後に、二つの事例を関連づけながら、その行方がアメリカ社会に意味するものは何かを検討して、結びとしたい。まず黒人運動能力の原因論争において、環境派がより広範な支持を得、一般市民の間で優位に立つならば、人間の養育や教育の大切さを認知し、人間の可変性と多様性に寛容な思想が普及する社会が成熟するだろう。そうなれば、アジア人ステレオタイプの行方も自明である。ステレオタイプが、ある集団のものとされる属性で個人を括り、判断するという、人間の可変性や多様性を軽んじる心理的メカニズムである以上、環境派が優位に立つ社会では厳しく批判され、排斥されるよりほかにない<sup>73)</sup>。反対に遺伝派が優位に立つならば、生物学や生理学が発言権を強め、人種差別を助長するような理論や思想がもてはやされるかもしれない。ステレオタイプは、「現実」あるいは「現実的」性質の反映とみなされ、当然視されることさえ起り得よう。かつて人類を全世界規模の危機に陥れた白人至上主義や人種優越論などの亡靈が蘇らないとも限らない。

以上からもわかるように、本稿が取り上げた二つの事例は、人種という概念を鍵として互いに深く関わっている。二つの事例をめぐる議論とその

動きに注意を向け、その中にあって確たる立場をとる選択は、スポーツ界のみに関わる問題でもなければ、むろん人類学や社会学などの社会科学界内の立論や意思表示にとどまるものでもない。それは、アメリカの社会と文化、延いては人間の社会と文化全体のあり方を問い合わせ、その望ましい方向を究明するための知的営為に他ならないのである。

## 注

- 1) 竹沢泰子編「人種概念の普遍性を問う：植民地主義、国民国家、創られた神話」『京都大学人文科学研究所国際シンポジウム報告書』2003年3月。
- 2) 1996 Racial Report Card, Center for the Study of Sport in Society [<http://www.sportinsociety.org/rgrc.html>].
- 3) 私たちが「人種」的思考に閉じ込められる例を、日本メディアによる2002年ワールドカップ報道に見たい。この時、カメルーン、セネガル、ナイジェリアなどアフリカ勢ナショナルチームのプレイ解説には、「黒人」と「身体能力」という二語が付きまとった。アナウンサー、解説者ともに「黒人」というカテゴリーを当然のように受け入れ、それに縛られ、「黒人」の身体能力を天性のものとする言説を惜しみなく生産し、視聴者である私たちも無批判にそれを消費していた。日本人にとって「黒人」は天性のアスリートで、異論の余地がほとんどないかの観さえある。この点についての類似した指摘は、山本敦久「サッカー解説『高い身体能力』って何」『朝日新聞』2002年6月30日 朝刊を参照。
- 4) 該当した1点は拙稿「アメリカスポーツと人種—日米両国における研究の動向と展望—」『武藏大学人文学会雑誌』第33巻 第4号 2002年5月。この小稿で調査した時点では、「アメリカ」と「スポーツ」で「雑誌記事索引」と「学会年報・論文集」を探すと、それぞれで135件と26件、「人種」で絞り込むとそれぞれ0件だったことを付記しておく。いずれにせよ、「人種」と「アメリカスポーツ」の交わる地点になると、研究者もジャーナリストも驚くほど寡黙になることに、注意を喚起しておきたい。
- 5) タイトルにもあるように、本稿では「日本人」と「アジア人」を厳密に区別せず、互換的に用いるものとする。その主たる理由は、日本人ステレオタイプとアジア人ステレオタイプの間にかなりの程度の重複が見られ、現時点で区別するだけの準備が整っていないからである。しかし厳密には、両者は切り離して考察されるべきものであることはいうまでもない。さらなる調査を踏まえて、その作業に取り組むものとしたい。
- 6) このテーマに取り組む過程で、いくつかの小論を発表してきた。それらを下敷にして、新しい論点や書誌情報を加えてまとめたものが本稿である。「21世紀を読む：松井とNYメディア—破れるか従来の日本人像」『毎日新聞』2003年2月9日 朝刊、「アメリカの「人種」論争と日本人アスリート」『力の意志』2003年10月号、「アメリカスポーツの今—「人種」への冷ややかで執拗な視線—」『現代スポーツ評論』第9号 2003年、「人種とスポーツをめぐるアメリカの言説—黒人は天性のアスリートか？」寒川恒夫編『スポーツ人類学講義（仮題）』大修館書店 2004年3月（出版予定）などを参照。また、京都大学人文科学研究

## 人種研究の対象としてのアメリカスポーツ 川島浩平

所での研究会や、日本スポーツ人類学会の「スポジンサロン」にて発表する機会を与えられ、多くの貴重な助言や暖かい支援の言葉をいただいた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

- 7) とはいえる、一枚岩の否定が存在しているわけではない。「人種」概念を否定または放棄するものが優勢とはいえる、同概念の有効性や利便性を支持する学者も少なくない。例えばマット・カートミルは、自然人類学者と文化人類学者の違いを指摘し、前者には人種を認める立場がマイノリティながらも根強く存在すると述べ、後者がイデオロギーに固執しているのではと暗に批判する—Matt Cartmill, "The Status of the Race Concept in Physical Anthropology," *American Anthropologist* 100 (September 1988), pp. 651-660を参照。ラナジット・チャクラボティらは、人間のカテゴリー化のメリットを説き、危険視する風潮に一石を投じる—Ranajit Chakraborty, et al., "Letter to the Editor: Reply to Baer," *American Journal of Human Genetics* 53 (1993), p. 531を参照。アメリカ生物学界の主要専門誌では、「人種」という言葉の使用をめぐり、激論が闘わされた。この言葉を安易に用いたと抗議するバリー・ボギン—Barry Bogin, "Letter to the Editor," *American Journal of Human Biology* 10 (1998), p. 279を参照—に対し、クロード・ブシャールらは「人種」差が存在しないと信じ込むより、それが本当ないかを検証する姿勢のほうが大切と反論している—Claude Bouchard, Arthur S Leon, et al., "Response," *American Journal of Human Biology* 10 (1998), pp. 280-281を参照。この論争に第三者が割って入り、どちらの意見も批判しつつ、自身は「人種」の使用に反対している—Robert M. Malina, "Race: Confusion about Zoological and Social Taxonomies, and their Places in Science," *American Journal of Human Biology* 13 (2001), p. 569-575を参照。
- 8) 原文では、"Race refers to a category of people regarded as socially distinct because they share genetically transmitted traits believed to be important in a group or society" である—Jay J. Coakley, *Sports in Society. Issues and Controversies* (Boston, MA: WCB McGraw Hill, 1998 [sixth ed.]), p. 249を参照。
- 9) William M. Cobb, "The Negro as a Biological Element in the American Population," *Journal of Negro Education* 8 (1939), p. 343.
- 10) ジョー・ルイスの伝記で翻訳されているものとして次を参照。クリス・ミード著（佐藤恵一訳）『チャンピオン ジョー・ルイスの生涯』東京書籍 1988年。
- 11) Rob Ruck, *Sandlot Seasons: Sport in Black Pittsburgh* (Urbana: University of Illinois Press, 1993).
- 12) William G. Kelly, "Jackie Robinson and the Press," *Journalism Quarterly* 53 (Spring 1976), pp. 137-139; Pat Washburn, "New York Newspapers and Robinson's First Season," *Journalism Quarterly* 58 (Winter 1981), pp. 640-644.
- 13) 無論、タイガー・ウッズ、ビーナス・ウィリアムズ、セリーナ・ウィリアムズらはその顕著な例である。拙稿「第57章スポーツと人種—差別は解消されたのか」明石紀雄／川島浩平編『現代アメリカ社会を知るための60章』明石書店 1998年、および「第28章スポーツと人種—漸次的・部分的人種統合と偏見の壁」明石紀雄監修『21世紀アメリカ社会を知るための67章』明石書店 2002年。

- 14) Jere Longman, "Black Swimmers Making a Bid for the Olympics," *New York Times* (March 10, 1996), C22.
- 15) "Black Dominance," *Time* (May 9, 1977), pp. 57-60.
- 16) David Zang, "Calvin Hill Interview," *Journal of Sport History* 15 (winter, 1988), pp. 334-355。  
但し、キャルビン・ヒルは後年、この問題についてより慎重な態度をとるようになってい  
るので、注意する必要がある。
- 17) 黒人アスリートに浸透する先天的運動能力についての信念に関するレポートの例として、  
以下を参照。S. L. Price, "Whatever Happened to the White Athlete," *Sports Illustrated* 38  
(December 8, 1997)。ジャーナリストとして、黒人アスリートの天性を認める立場をとる  
者は少なくない。後述するジョン・エンタインはその最新の論客である。他の論者のうち、  
本稿で言及できなかったもの数点挙げておくが、本論争におけるジャーナリズムの位置に  
ついては稿を改めて論じたい。その一人アンバー・バーフットは、現在遺伝学の革命が進  
行中で、黒人の先天的優越を信じない人間は、圧倒的な科学的証拠の前に敗北しつつある  
と宣言し、ゲノム計画がいずれ真実を明らかにするだろうと予言する—Amby Burfoot,  
"White Men Can't Run," *Runner's World* (August 1992)を参照。ピーター・セヴェランスは、  
メキシコ奥地のタラウマラ族に長距離ランナーとしての天性の素質を見、その人々につい  
ての現地レポートを行なう—Peter Severance, "The Legend of the Tarahumara," *Runner's World* (December 1993), pp. 74-80を参照。ポール・ヌキは、どの民族集団が運良くハイ・  
パフォーマンス・ジーンに恵まれているかについての研究はないとはいえ、アスリート  
の能力の90%は遺伝子の組成で決定されると報告する—Paul Nuki, "Top Athletes Born  
with 'Go Faster' Gene," *Sunday Times* (May 17, 1998)を参照。ジョージー・グラシウスは、  
第17染色体の遺伝子に発見された持久力を増す資質を紹介する—Josie Glausiusz, "The  
Genes of 1998," *Discover* 20 (January 1999), p. 20を参照。
- 18) Leonard Shapiro, "'Jimmy the Greek' Says Blacks are 'Bred' for Sports," *Washington Post*  
(January 16, 1988), A10.
- 19) Richard Goldstein, "Al Campanis is Dead at 81; Ignited Baseball over Race," *New York Times*  
(June 22, 1998), C11.
- 20) Martin Kane, "An Assessment of 'Black Is Best,'" *Sports Illustrated* (January 18, 1971).
- 21) Harry Edwards, "The Sources of Black Athletic Superiority," *Black Scholar* (November  
1971), pp. 33-39.
- 22) 「スクールスポーツ」とは義務教育で指導され、設備や道具に比較的資金がかからないベ  
ースボール、バスケットボール、陸上など、「クラブスポーツ」とは社交クラブなどで愛好され、  
設備や道具に巨額の投資が必要なゴルフ、テニス、水泳などである。黒人がベースボール、  
バスケットボール、陸上などで活躍しているのは、それらがすべて幼少期から指導を受けることのできるスクールスポーツであるから、というのがフィリップ説  
の骨子である—John Phillips, "Toward an Explanation of Racial Variations in Top-Level  
Sports Participation," *International Review of Sports Sociology* 11 (1976)を参照。
- 23) スタッキング研究は、豊富な数量データを駆使して人種によるポジションの偏りを人種差  
別の遺物として告発したロイとマッケルボーグの研究を起点とし、80年代を通じてアメリ

力におけるスポーツ社会学の主流派を占めるに至った—J. W. Loy and J. F. McElvogue, "Racial Segregation in American Sport," *International Review of Sport Sociology* 5 (1970), pp. 5-23 を参照。90年代になると下火になったとはいえ、オーストラリアのラグビーを事例とするなど、国際的な影響も及ぼしている—Christopher J. Hallinan, "Aborigines and Positional Segregation in Australian Rugby League," *International Review for the Sociology of Sport* 26 (1991), pp. 69-78を参照。

- 24) スポーツへの参加と上達の原因是、先天的能力というよりも本人が知覚する能力にあるとする議論は、「卵か鶏か」的傾向を否めないとはいえる。一つの時代の潮流として記憶に留めておくべきである。知覚能力に注目した一人口バーツらは、小学生のチームスポーツを対象として、参加者と不参加者の自信の度合について考察する—G. Roberts, D. Kleiber and J. Duda, "An Analysis of Motivation in Children's Sport: The Role of Perceived Competence in Participation," *Journal of Sport Psychology* 3 (1981), pp. 206-216を参照。クリントとワイズは、体操選手をサンプルとして知覚能力を検証し、スポーツ参加と上達は、先天的要因というより、自信の度合によると結論する—K. Klint and M. Weiss, "Perceived Competence and Motives for Participating in Youth Sports: A Test of Harter's Competence Motivation Theory," *Journal of Sport Psychology* 9 (1987), pp. 55-65を参照。ルーディンも知覚能力の重要性を検証する—M. Rudisill, "Influence of Perceived Competence and Causal Dimension Orientation on Expectations, Persistence, and Performance during Perceived Failure," *Research Quarterly for Exercise and Sport* 60. 2 (1989), pp. 166-175を参照。
- 25) Laurel R. Davis, "The Articulation of Difference: White Preoccupation with the Question of Racially Linked Genetic Difference among Athletes," *Sociology of Sport Journal* 7 (1990), pp. 179-187.
- 26) Jay J. Coakley, *Sports in Society*.
- 27) 『日経新聞』2003年7月15日。
- 28) 最も古い研究の一つに、ミード・バッハによるものがある。彼は白人、黒人、アメリカ先住民三者を対象とする実験を行ない、黒人の方が白人より反射が速いと主張する—R. Meade Bache, "Reaction Time with Reference to Race," *Psychological Review* (1895) を参照。イデ・ヒロは、白人21名と黒人29名の死体を解剖し、神経サイズを4つの観点から比較した結果、黒人の方が神経の直径が大きく、それゆえ反射が速いと述べる—Hiro Ide, "On Several Characters Shown by the Cross-Sections of the Median and Sciatic Nerves of Human Males According to Race," *Journal of Comparative Neurology* 51 (1930) を参照。
- 29) 死体を測定することで白人と黒人の体型差異を実証した最初の研究といわれのが、トッドらによるものである—T. Todd and A. Lindala, "Dimensions of the Body: White and American Negroes of Both Sexes," *American Journal of Physical Anthropology* 12 (1928), pp. 35-119 を参照。二人種間の体型的差異の存在を否定するためによく引用されるものに、ウイリアム・コップが1936年に発表した論文がある。1936年ベルリンオリンピックのゴールドメダリスト、ジェシー・オーウェンスの身体を測定し、黒人運動選手の優秀さの原因となるようないかなる肉体的特徴も認められないと主張する。但し、後の論文では黒人の固有性を支持するなど、矛盾を露呈している—William M. Cobb, "Race and Runners," *Journal of*

*Health and Physical Education* (January 1936) を参照。エレノア・メセニーは、黒人の肉体的特徴に関する研究者として今日なお言及される。彼女は、白人との比較において黒人が長い手脚、重い骨、狭い肺などを有し、それゆえ得手、不得手の運動種目が存在すると推論する—Eleanor Metheny, "Some Differences in Bodily Proportions between American Negro and White Male College Students as Related to Athletic Performance," *Research Quarterly* 10 (December 1939), pp. 41-53を参照。ジョーダンは研究動向を紹介し、白人と黒人の間に、体脂肪率や体格などの点で差異があると示唆する—J. Jordan, "Physiological and Anthropometric Comparisons of Negroes and Whites," *Journal of Health, Physical Education, and Recreation* 40 (November-December 1969), pp. 93-99を参照。エヴェレスとタナーは、身長、体重とそれぞれの増加率、皮下脂肪などの幼少期から思春期までの変化を、世界中からサンプルを集めて比較した包括的調査を行なっている。アジア人、ヨーロッパ人、アフリカ系アメリカ人を比較し、アジア人より他二者の方が、背が高い、脚が長い、手が長いなど、日本人が常識的に感じている差異を、統計的に確認する—P. B. Eveleth and J. M. Tanner, *Worldwide Variation in Human Growth* (Cambridge: Cambridge University Press, 1990 [second ed.]) を参照。

- 30) アーサー・キースは、ホルモン分泌から人種差を説明しようと試み、黒人のアドレナリン腺は白人より大きく、それゆえ運動能力に優ると論じる—Arthur Keith, "The Differentiation of Mankind into Racial Types," *Nature* 104 (November 13, 1919), pp. 301-305を参照。リー・エリスらは、多くのサンプルを用いて黒人のテストステロン値が、白人やヒスピニックよりも高いと主張する—Lee Ellis and Nyborg Helmuth, "Racial/Ethnic Variations in Male Testosterone Levels: A Probable Contributor to Group Differences in Health," *Steroids* 57 (1992), pp. 72-75を参照。しかしこの説はウイリアム・ジェームズに反論されている—William H. James, "Causes of Racial Differences in Testosterone Levels of Men," *Journal of Clinical Endocrinology and Metabolism* 80 (1995), pp. 2289-2290を参照。
- 31) 黒人には糖尿病が少ないとするニューオーリンズの医師リーマンは、ストレスや気苦労がないことが黒人の特色であると論じる—I. I. Lemann, "Diabetes Mellitus in the Negro Race," *Southern Medical Journal* 14 (July 1921), pp. 523-524を参照。フランク・ボーランドは、歯茎が青い黒人には歯牙があるという俗説を否定するが、噛むという野蛮な行為を黒人特有のものと見なしている—Frank K. Boland, "Morsus Humanus: Sixty Cases of Human Bites in Negroes," *Journal of the American Medical Association* 116 (January 11, 1941) を参照。ウイリアム・コップは、白人が社会的ストレスとプレッシャーで常にいらいらしているのに比べ、黒人は内面の平穏さを維持しているので、常時リラックスできると指摘する—William M. Cobb, "Physical Anthropology of the American Negro," *American Journal of Physical Anthropology* 29 (June 1942) を参照。ワーシーとマークルは、黒人は「反応力」を要求されるアメフトやボクシングのようなスポーツに秀で、白人は「自己ベース」で行なうゴルフやボーリングのようなスポーツに長けていることを、統計的に証明しようとする—M. Worthy and A. Markle, "Racial Differences in Reactive Versus Self-Paced Sports Activities," *Journal of Personality and Social Psychology* 16 (1970), pp. 439-443を参照。ダンヒルファーはワーシー・マークル仮説を支持し、稿末で人種差は遺伝的要因によるものが大きいと主張する

- J. Dunn and M. Lupfer, "A Comparison of Black and White Boys' Performance in Self-Paced and Reactive Sports Activities," *Journal of Applied Social Psychology* 4 (1974), pp. 24-35を参照。エドワード・ミラーは、白人、黒人、アジア人が異なる肉体的、精神的特徴を獲得したのは、進化の過程における生殖戦略の違いによると論じる。黒人は白人よりも、そして白人はアジア人よりもリラックスしていて不安にかられにくいという—Edward Miller, "Paternal Provisioning versus Mate Seeking in Human Populations," *Personality and Individual Differences* 17 (August 1994), pp. 227-255を参照。
- 32) ニューオーリンズで多くの黒人女性に治療を施したジェフ・ミラーは、痛みに強い点等を黒人の生理的特質として当然視している—C. Jeff Miller, "Special Medical Problems of the Colored Woman," *Southern Medical Journal* 25 (July 1932)を参照。ウィリアム・ハンターは、黒人はストレスや痛みを感じにくくと論じる—William S. Hunter, "Coronary Occlusion in Negroes," *Journal of the American Medical Association* 131 (May 4, 1946)を参照。ウィリアム・メンゲルは、長年の産婦人科経験に基づいて信念を吐露している。その意図は偏見の否定にあるようだが、皮肉にも先天的人種差に対する本人の確信を浮かび上がらせてしまう—William F. Mengert, "Racial Contrasts in Obstetrics and Gynecology," *Journal of the National Medical Association* 58 (November 1966)を参照。三名のアフリカ系アメリカ人研究者が、黒人は白人よりもヘモグロビン値が低く、それは居住州や階級に左右されることなく一定であることを検証している。その原因として遺伝と環境の両者を挙げるが、この差異は臨床的に重要であると結んでいる—Stanley M. Garn, Nathan J. Smith and Diane C. Clark, "Life-long Differences in Hemoglobin Levels between Blacks and Whites," *Journal of the National Medical Association* 67 (March 1975), pp. 95-96を参照。テレサ・オーバーフィールドは、人種差異をさまざまな医学的見地から承認し、それを踏まえるのが医療にとって有益だと主張する—Theresa Overfield, *Biologic Variation in Health and Illness* (Boca Raton: CRC, 1995)を参照。ラジ・ボーバルは、人種、エスニシティ概念を科学・医学に用いる危険を指摘して反対する。歴史的にこの概念が乱用された過去を振り返り、現在それを用いる研究が確たる成果をもたらしていないとする—Raj Bhopal, "Is Research into Ethnicity and Health Racist, Unsound, or Important Science?" *British Medical Journal* 314 (June 14, 1997)を参照。カンプー・シューは、鐸型赤血球貧血に対する治療が成功した事例に関する詳報を提供する。鐸型赤血球貧血は赤道アフリカ地方の出身者が多く、人種と医学を結び付ける上でよく注目される疾病である。アルツハイマー症のかかりやすさとも関連があるといわれる—Kangpu Xu, et al., "First Unaffected Pregnancy Using Preimplantation Genetic Diagnosis for Sickle Cell Anemia," *Journal of the American Medical Association* 271 (May 12, 1999), pp. 1701-1706を参照。
- 33) エドワイン・ヘンダーソンは、ジェシー・オーエンスやジョー・ルイスらスポーツ選手の活躍を歓迎し、この分野での成功が人種的偏見を減していくであろうとする楽観論を展開する。スポーツでの卓越は、「中間航路」を生き延び、奴隸制の苦難に耐え得た強者（進化論的意味での）の末裔だからであり、それゆえ強靭な筋肉繊維を遺伝的に受け継いでいると主張する—Edwin Henderson, "The Negro Athlete and Race Prejudice," *Opportunity* (March 1936), p. 36を参照。イギリス人アドルフ・エイブラハムズは、黒人の優れた運動

能力を気質、気候、心理など多方面から検討し、その上で遺伝要因を懷疑的ながらも支持する。とりわけ筋肉に注目し、収縮性や粘度の点で特別なものがあるとする—Adolphe Abrahams, "Race and Athletics," *Eugenics Review* 44 (October 1952), p. 144を参照。オガタとムラタは、筋肉を分析する前提として、三分類する試みを提起する—T. Ogata and F. Murata, "Cytological Features of Three Fiber Types in Human Striated Muscle," *Tohoku Journal of Experimental Medicine* 99 (1969), p. 245を参照。しかしガスとイエリンは、筋肉は固定的なものではないとし、赤筋対白筋、速筋対遅筋も含め、いかなる分類をも批判的対象とする—L. Guth and H. Yellin, "The Dynamic Nature of the So-Called 'Fiber Types' of Mammalian Skeletal Muscle," *Experimental Neurology* 31 (1971), pp. 277-300を参照。ゴルニックらも固定的筋肉観に批判的である。筋肉にはタイプI(遅筋)とタイプII(速筋)があるとはいえ、訓練によってある程度の転換は可能であるとみる—P. D. Gollnick, et al., "Enzyme Activity and Fiber Composition in Skeletal Muscle of Untrained and Trained Men," *Journal of Applied Physiology* 33 (September 1972), pp. 312-319を参照。他方デイヴィッド・コスティルは、訓練しても筋肉組成自体に変化はみられないで、運動能力は概ね遺伝によると述べ、運動種目によって選手の筋肉組成と酵素活動にかなり違いが見られると論じる—David L. Costill, et al., "Skeletal Muscle Enzymes and Fiber Composition in Male and Female Track Athletes," *Journal of Applied Physiology* 40 (1976), pp. 149-154を参照。ピ埃尔・エイマらは、被験者に屈伸運動をさせ、白人(フレンチカナダ人)と黒人(アフリカ出身者)を比較する。30秒を越えると黒人のほうが疲れやすいことから、速筋割合の高さを示唆する—Pierre F. M. Ama, et al., "Anaerobic Performances in Black and White Subjects," *Medicine and Science in Sports and Exercise* 22 (1990), pp. 508-511を参照。レヴェスキューらは、日常的に運動をしていない黒人と白人を比較し、どちらともトレーニングによって同じように筋肉の質が変化したことから、両者に一般的に見られる差異がトレーニングによるものとはいいにくいと主張する—M. Levesque, et al., "Muscle Fiber Type Characteristics in Black African and White Males Before and After 12 Weeks of Sprint Training," *Canadian Journal of Applied Physiology* 19 (1994), supplement p. 25を参照。シモノーとブショールは、筋肉の組成を決定づけるのは、15%がエラー、40%が環境要因、45%が遺伝要因であるとする—J. M. Simoneau and C. Bouchard, "Genetic Determinism of Fiber Type Proportion in Human Skeletal Muscle," *FASEB Journal* 9 (1995), pp. 1091-1095を参照。

- 34) ウィリアムズとスコットは、乳児の運動能力の発達速度は、人種ではなく養育環境によるものであると主張する—J. R. Williams and R. B. Scott, "Growth and Development of Negro Infants: Motor Development and Its Relationship to Child Rearing Practices in Two Groups of Negro Infants," *Child Development* 24 (1953), pp. 103-121を参照。だが、反論が多い。ゲベールとディーンは、ウガンダの赤ん坊の早熟さを多角的に検証し、運動能力の発育は、ウガンダのほうが同年代のヨーロッパの子供より大きく進んでいると発表した—Marcelle Geber and R.F.A. Dean, "Gesell Tests on African Children," *Pediatrics* 20 (1957), pp. 1061-1064を参照。ウィリアム・フランケンバーグらは、黒人の子供の早熟さを環境因で説明するのが不可能であることを繰り返し検証する—William K. Frankenburg and Josiah B. Dodds, "The Denver Developmental Screening Test," *Journal of Pediatrics* 71 (August

- 1967), pp. 181-191および William K. Frankenburg, Nathan P. Dick, and James Carland, "Development of Preschool-Aged Children of Different Social and Ethnic Groups: Implications for Developmental Screening," *Journal of Pediatrics* 87 (July 1975), pp. 125-132を参照。ロバート・マリーナは、研究の質、量どちらも不十分であると断った上で、黒人と白人では体型の違いが幼い頃から現れると主張する—Robert M. Malina, "Growth and Physical Performance of American Negro and White children," *Clinical Pediatrics* 8 (1969), pp. 9-38, 476-483を参照。ホリー・シンタスも、黒人の赤ん坊は白人やアジア人よりも一週間ほど早産だが、羊水や骨の発育その他の指標からすると成長が早いとし、その原因を環境に見つけるのは困難だと論じる—Holly Cintas, "Cross-Cultural Variation in Infant Motor Development," *Physical and Occupational Therapy in Pediatrics* 8 (1988), pp. 1-20を参照。
- 35) デイモンらは、黒人のほうが白人より脂質が少ないと結論を導いている—A. Damon, et al., "Predicting Somatotype from Body Measurements," *American Journal of Physical Anthropology* 20 (1962), pp. 461-471を参照。スタンレー・ガーンは、黒人と白人の体脂肪率や体格の違いを指摘し、人種間の遺伝的差異を示唆する—Stanley M. Garn, "Human Biology and Research in Body Composition," *Annals of the New York Academy of Sciences* 110 (1963), pp. 429-446を参照。キャサリン・グリーブスらは、白人、黒人、ヒスパニック三者の体脂肪分布は、それぞれ特有のパターンがみられ、ヒスパニック、黒人のほうが白人より胴回りの脂肪が多いとする。世代を越えて三者のパターンは類似し、遺伝性であることを示唆する—Cathrynn Greaves, et al., "Ethnic Differences in Anthropometric Characteristics of Young Children and Their Parents," *Human Biology* 61 (1989), pp. 459-477を参照。以上の研究は、体脂肪率の人種間差異とその遺伝の可能性を容認するに前向きの立場であるが、ローラ・ギレイスらは次注にみると骨密度の差異には注目しつつも、体脂肪について懐疑的である—Laura Gerace, et al., "Skeletal Differences Between Black and White Men and Their Relevance to Body Composition Estimates," *American Journal of Human Biology* 6 (1994), p. 260を参照。
- 36) 脂肪を長年研究してきたスタンレー・ガーンは、骨と筋肉を取り上げ、人間集団間の多様性とその原因を考察する。黒人の骨が重いことを指摘し、人種間の遺伝的差異を示唆する (Garn 1963)。コーリーらは、黒人は白人より骨の質量が大きいことをデータで裏付けている。骨にあるミネラルの量は年とともに減少し、肥満によって増加するが、その点を考慮しても黒人の骨質量は白人より大きいとする—J. A. Cauley, et al., "Black-White Differences in Serum Sex Hormones and Bone Mineral Density," *American Journal of Epidemiology* 139 (1994), pp. 1035-1046を参照。ローラ・ギレイスは、黒人と白人の骨密度比較で黒の方が高いと主張し、19世紀以来の説を支持する。黒人の方が腕と脚がながく、腰周りが始まっていることを裏付ける (Gerace 1994)。
- 37) アルバート・デイモンは、心肺機能にみられる人種間差異（黒の方方が小さい）を説明すべく、意欲、体型、喫煙などの変数を検討するが、どれでも説明できない。結果として、両者間の遺伝的差異を、慎重な論調でほのめかす—Albert Damon, "Negro-White Differences in Pulmonary Function (Vital Capacity, Timed Vital Capacity, and Expiratory Flow Rate)," *Human Biology* 38 (December 1966), p. 331を参照。

- 38) ベント・サルティンは、走行経済性と乳酸蓄積についてスカンジナビア人とケニア人を比較し走行経済性には大差あり、乳酸蓄積にはやや差がある（どちらもケニア人が優位）ことを検証する。しかしこのような差の原因については慎重に態度を保留している—Bengt Saltin, "Morphology, Enzyme Activities and Buffer Capacity in Leg Muscles of Kenyan and Scandinavian Runners" *Scandinavian Journal of Medicine and Science in Sports* 5 (1995), p. 226を参照。ウェストンらもまた、運動能力の人種間差異を強調する—A. R. Weston, "African Distance Runners Exhibit Greater Fatigue Resistance, Lower Lactate Accumulation and Higher Oxidative Enzyme Activity," *Journal of Applied Physiology* 86 (March 1999), pp. 915-923を参照。
- 39) ランダーズらは、虹彩色と運動能力の関係について調査し、その関連を示唆する報告を行なった。黒ずんだ虹彩を持つものは、明るい虹彩をもつものよりも反応時間がわずかに早いという—D. M. Landers, et al., "The Influence of External Stimuli and Eye color on Reactive Motor Behavior," in R. W. Christina and D. M. Landers, eds., *Psychology of Motor Behavior and Sport* (Champaign: Human Kinetics Publishers, 1976), pp. 94-112を参照。
- 40) アンドリーセンらは、MRIなどを用いて脳みその大きさを図り、知能との相関関係を示唆して物議を醸したが、著者は因果関係ではなく、あくまでも相関関係であると反論している。本研究の限界や留保についても詳述しており、全体のトーンは慎重である—N. C. Andreasen, et al., "Intelligence and Brain Structure in Normal Individuals," *American Journal of Psychiatry* 150 (1993), pp. 130-134を参照。
- 41) Pierre F. M. Ama, et al., "Skeletal Muscle Characteristics in Sedentary Black and Caucasian Males," *Journal of Applied Psychology* 61 (1986), pp. 1758-1761.
- 42) Pieter Coetzer, et al., "Superior Fatigue Resistance of Elite Black South African Distance Runners," *Journal of Applied Physiology* 75 (1993), pp. 1822-1827.
- 43) A. R. Weston, et al., "Running Economy of African and Caucasian Distance Runners," *Medicine and Science in Sports and Exercise* (April 2000).
- 44) Bengt Saltin, et al., "Aerobic Exercise Capacity at Sea Level and at Altitude in Kenyan Boys, Junior and Senior Runners Compared with Scandinavian Runners," *Scandinavian Journal of Medical Science and Sports* 5 (1995), pp. 209-221.
- 45) David K. Wiggins, "'Great Speed But Little Stamina': The Historical Debate Over Black Athletic Superiority," *Journal of Sport History* 16. 2 (Summer 1989), pp. 158-185.
- 46) John Hoberman, *Darwin's Athletes: How Sport Has Damaged Black America and Preserved the Myth of Race* (Boston: Houghton Mifflin, 1997).
- 47) Jon Entine, *Taboo. Why Black Athletes Dominate Sports and Why We Are Afraid to Talk About It* (New York: Public Affairs, 2000).
- 48) ジョン・エンタイン（星野裕一訳）『黒人アスリートはなぜ強いのか？その身体の秘密と苦悩の歴史に迫る』創元社 2003年。
- 49) J. Borres and M. Hebbelinck, "Review of Studies of Olympic Athlete," J. E. L. Carter, ed., *Physical Structure of Olympic Athletes, Part II: Kinanthropometry of Olympic Athletes* (Basel, Switzerland: S. Karger, 1984); David B. Welky, "Viking Girls, Mermaids, and Little Brown

## 人種研究の対象としてのアメリカスポーツ 川島浩平

- Men: U. S. Journalism and the 1932 Olympics," *Journal of Sport History* 24. 1 (Spring 1997), pp. 24-49; Dean Cromwell and Al Wesson, *Championship Techniques in Track and Field* (New York, 1941).
- 50) その端緒として, Marshall Smith, "Giving the Olympics an Anthropological Once-Over," *Life* (October 31, 1964), pp. 81-84Bなどが注目に値する。
- 51) J. Philippe Rushton, *Race, Evolution, and Behavior. A Life History Perspective* (Charles Darwin Research Institute, 2000 [third ed.]) ; J・フィリップ・ラッシュトン（蔵琢也・蔵研也訳）『人種進化行動』博品社 1996年；蔵琢也『美しさをめぐる進化論 容貌の社会生物学』勁草書房 1993年。
- 52) Martin Kane, "An Assessment"; John Capouya, "The Art and Science of Jumping," *Sport* (June 1986) 等。
- 53) 知能面の論点が、チャールズ・マレー著『ペル曲線』によってさらに衆目を集めることになったのは、周知の通りである。Charles Murray and Richard J. Herrnstein, "Race, Genes and I.Q.—An Apologia," *New Republic* 36 (October 31, 1994) なども参照。
- 54) Don Sabo, et al., "Television International Sport: Race, Ethnicity, and Nationalistic Bias," *Journal of Sport and Social Issues* 20. 1 (1996); Maureen Fan, "Asian Americans Are Still 'Victims' in News Media: Project Zinger Finds More Stereotypes, Ethnic Slurs," *Quill* 81 (March 1993), p. 16; Peter X. Feng, *Screening Asian Americans* (New Brunswick: Rutgers University Press, 2002); Darrell Y. Hamamoto, *Monitored Peril: Asian Americans and the Politics of TV Representation* (Minneapolis and London: University of Minnesota Press, 1994); W. M. Hurl and K. C. Kim, "The "Success" Image of Asian Americans: Its Validity, and its Practical and Theoretical Implications," *Ethnic and Racial Studies* 21. 4 (1989), pp. 512-538; David Tokiharu Mayeda, "From Model Minority to Economic Threat," *Journal of Sport and Social Issues* 23. 2 (May 1999), pp. 203-217; Murakami Yumiko, "Hollywood's Slanted View," *Japan Quarterly* 46. 3 (July-September 1999), pp. 54-62; C. Taylor and B. Stern, "Asian-Americans: Television Advertising and the "Model Minority" Stereotype," *Journal of Advertising* 26 (1997), pp. 47-60.
- 55) Stepan Fatsis, "Japan's Stars Wanted By U.S.: Nomo's Success Whets American Appetites," *Wall Street Journal* (February 21, 1997).
- 56) 以下、イチロー評について詳しくは、拙稿「"SUZUKI" から "ICHIRO" へ：2001年アメリカ・メジャーリーグ序盤戦における鈴木一朗（イチロー）とメディア報道」『武藏大学人文学会雑誌』第34巻 第2号 2002年を参照。
- 57) Caroline Chung Simpson, *An Absent Presence: Japanese Americans in Postwar American Culture, 1945-1960* (Durham: Duke University Press, 2001).
- 58) 注57で紹介したシンプソンの発言を、次の雑誌記事が引用したもの。David Shields, "Being Ichiro," *New York Times Magazine* (September 16, 2001), p. 6.
- 59) Ibid. 詳しくは拙稿『第27章：イチロー旋風と人種偏見—日本人大リーガーの活躍はアジア系ステレオタイプの反証となったか—』明石紀雄監修『21世紀アメリカ社会を知るために67章』。

- 60) Otake Hideko, "Japanese Reflections in an American Mirror," *Japan Quarterly* 46. 1 (January-March, 1999), pp. 78-82.
- 61) Kay Itoi, "Godzilla Is Coming: Japan's No. 1 Power Hitter is Heading to the Big Show," *Newsweek* (November 11, 2002), p. 33.
- 62) Jack Curry, "Yanks Welcome Matsui, Who Draws His First Crowd," *New York Times* (January 15, 2003).
- 63) 2003年シーズン前半に松井が極度のスランプに陥った時期、内野への凡ゴロが多くなった。その状況に対する辛辣なコメントにしばしば登場したセリフである。むろん、日本のホームランキングへの失望と軽蔑の念が込められていたことはいうまでもない。
- 64) しっかりとボールをミートして、確実にヒットを稼ぐ打者に向かられる賛辞とみてよい。「クラッチッター」(チャンスに強い打者)という表現もしばしば用いられた。
- 65) 筆者のホームページ [<http://webg.musashi.ac.jp/%E9%9D%96koharu/>]「メニュー」の「出版情報4:「ゴジラ松井と米メディア」に報道記事の一部を紹介してある。
- 66) [<http://msn.espn.go.com/>]
- 67) Sean McAdam, "Matsui Good, but Not All-Star Caliber," (July 11, 2003) [[http://espn.go.com/mlb/columns/mcadam\\_sean/1577637.html](http://espn.go.com/mlb/columns/mcadam_sean/1577637.html)]
- 68) Bob Klapisch, "Matsui earned All-Star nod the Hard Way," (July 11, 2003) [[http://espn.go.com/mlb/columns/klapisch\\_bob/1577633.html](http://espn.go.com/mlb/columns/klapisch_bob/1577633.html)]
- 69) 例えば2003年11月6日付けの『USA トゥデー』紙の記者4名は、新人王候補をそれぞれ挙げたが、松井を推したのは一人だけだった。『読売新聞』夕刊 2003年11月7日。
- 70) W. M. Hurh, and Kim, K. C. "The 'Success' Image".
- 71) P. Wong, C. Lai, R. Nagawawa, and T. Lin, "Asian Americans as a Model Minority: Self-Perceptions and Perceptions by Other Racial Groups," *Sociological Perspectives* 41 (1998), pp. 95-118; 村上由見子『アジア系アメリカ人』中公新書 1997年。
- 72) 少し本筋からはずれるかもしれないが、ここで2003年夏に日本陸上界が達成した画期的偉業を想起したい。その偉業とは、いうまでもなく、パリで開かれた第9回IAAF世界陸上競技選手権大会の200Mで、末續慎吾が果たした銅メダル獲得である。日本陸上界におけるアンチステレオタイプの出現は、私たちの目と心を大きく広げ、日本人の運動能力の限界と可能性を見直す契機を提供した。疾走する黒人アスリートに混ざってゴールに突進した白の肉体は、単純化されたアジア人イメージを打ち破る端緒となり、人種という植民地主義の忌むべきレガシーに、一矢を報いたはずである。今後アジア人アスリートが更に活躍し、個人の才能と努力を見直し、人種という枠組でとらわれない思想と人間観を確たるものにしてくれるよう、強く望みたい。拙稿「アメリカの「人種」論争と日本人アスリート」参照。
- 73) ステレオタイプの定義については、上瀬由美子『ステレオタイプの社会心理学—偏見の解消に向けて』サイエンス社 2002年などを参照。

(2004年1月8日 受理)